
神様に、ないものねだり

佐乃海テル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様に、ないものねだり

【Nコード】

N4014C

【作者名】

佐乃海テル

【あらすじ】

かんかんに怒っている神様に、若い二人がどうしても欲しいと懇願したもの。それは新しい命。自分たちの先祖の犯した罪と向かい合うも、それでも彼らは愛し合い、それを求める。

prologue (前書き)

なろう登録1周年記念作品、になるといいですね(え
夏休みということで連載は少々早めに。欲を言えばちょうど1年に
なる8/7に完結出来たらなと思います。

今回は原稿を書きためており、またなかなか自分の中のモチベーシ
ョンも安定した作品でもあります。

ちやちいですが、テーマは壮大です。少し自分でも書くのが恥ずか
しい部分もあります。この作品を読んで少しでもそれが感じられた
ら、私はとても幸せです。

それでは、「神様に、ないものねだり」の始まりです。

prologue

こんなにも寝苦しい夜は、久々だった。

僕はベッドから起き上がると、電気を付けてキッチンへ向かった。冷蔵庫にしまつてある麦茶を飲んでリラックスしようと考えたが、余計目が冴えてしまい、眠れなくなった。

ベッドに座り、カーテンを開けて、すでに水色に染まろうとしている空を見て、僕は諦めのため息をついた。月はまだ空に浮かんでいる。僕は産まれてから一度も、この天体を美しいと思ったことはなかった。そしてこの国に昔から伝わる、朧月夜という曲の意味も僕には分からなかった。なぜなら僕が普段見ている月は、いつもおぼろ気で、正確な形が分からないからだ。何も珍しくないことを歌つていても感動出来るわけがない。

しばらく僕は月をぼんやりと見ていた。そしてとてもとても寂しい気持ちになった。それは珍しいことどころか、毎日のことだった。いたたまれなくなった僕はまたキッチンに向かい、今度は電話に手を伸ばした。するとその瞬間、コール音が鳴った。受話器をすぐに手に取る。

「もしもし?」

電話の相手は予想通りだった。それもそのはず、今自分がまさに電話をかけようとしていた相手であるだったからだ。彼女の名はハシミという。

「ああ」

「寝てた?」

「いや、起きてたよ」

「そうよね、出るのが早かったもの」

僕はいささか恥ずかしい気持ちになった。

「いつになく寝苦しい夜だね、麦茶を飲んだり空を眺めたりとして

いるんだが、今日の僕はどうも無敵らしい。睡魔が全く寄ってこないんだよ」

「私もまったく同じだわ」

僕とハツミは他愛もない話を30分ほどした。話のネタが尽きてきたところで、やっと眠気らしきものがやってきた。

「少し眠くなってきたようだ」

「ええ、私も」

「じゃあまた朝な」

「あら、もう世間では朝よ」

僕らは電話を切った。そして僕は床についた。最後のハツミの言葉はほんのジョークだが、だが僕の言葉も嘘ではない。僕らの住むこの世界には、少なくともいま現在は世間や社会などは存在しない。ゆえに朝などもない。僕とハツミが朝なら、世界は朝なのだ。

そして僕とハツミの考えが食い違うことはなかった。僕が寂しく誰かとのコミュニケーションを欲しているときには、ハツミも欲している。そうやってこの世界は、今日まで動いてきたのだ。

そんなことと、ハツミの言葉を思い出しながら、僕は眠りに引きずり込まれていった。さっきまでが嘘のような、実にスムーズな寝入りだった。

prologue (後書き)

連載中のご意見・ご感想もお待ちしております。

目覚める頃には日は天にまで上っていた。部屋の温度計は三十度を指しており、そのせりか起きたての僕は汗びっしりだった。することもなかったので、僕はシャワーを浴びてからハツミの家に行くことにした。

「おはよう」

僕はハツミの家の扉を開けながら言った。

「おはよう。朝ご飯、食べる？」

「うん、実は食べるものがなくてね」

「それならちよっどいいわ」

ハツミが作ってくれたトーストとサラダをたいらげ、僕はハツミの部屋を見渡した。とてもさっぱりしたりリビングで、同じ平屋とは思えないほど、自分の家よりも機能的に見えた。

「ところで」

ハツミが笑いを含みながら、声をかけてきた。

「ん？」

「今日は何の日だか、覚えてる？」

「何の日も何も、この国に特筆すべき記念日もなかるう」

「えー」

ハツミは残念そうな表情をした。

「なんだ、お前の誕生日とかか」

「合ってるけど……そんな言われ方されても嬉しくない」

「14になるのか」

「コーチももうすぐじゃない」

コーチは僕の名前だ。

ハツミは今日で、僕はもう少ししたら14歳になる。14歳と言

えば昔は学校に通い、勉強やその他のことに忙しい年齢だったという記録が残っているが、僕らにはまったくそのようなことがない。そもそも学校すらないのだ。

なぜ学校がないか。その理由は至極簡単な話で、教師がいなかったらである。もつと言えば生徒もいないからである。他の国から連れてくれば解決するだとか、そういう次元の話ではない。人間がいなのだ。

電気は全自動発電所が発電し、また使った電気を再利用する循環システムが出来上がっている。道路交通　バスやタクシーなども基本無人で出来ている。お金もかからない。お金がかかるシステムがあっても、すり抜ければいい話だ。取り締まる警察官もいない。無人交番はあるが、それは本当の無人交番で、ロボットすらもない。ただの大きな箱だ。

テレビもつくことはつくが、毎日NHKの講座が繰り返し繰り返し再放送されているだけで、確かに小さい頃はこの番組で基本的な知識を得たが、今となっては面白くも何ともない。

いつも一緒に過ごしているハツミの誕生日を忘れていた。そのことに僕も少しは罪悪感を感じた。そこでこういう提案を試してみた。

「じゃあ、どっか行くか？」

「迷惑にならないのなら」

「どこに行きたい」

「……図書館」

この図書館、という施設もまた無人である。地下鉄で駅三つ分ほど離れたところにある。人がいない上に、とても広い面積と半端ない蔵書数を誇る図書館だ。もちろん調べごとや勉強に使うのにはもってこいかもしれないが、自分としてはただのデータベースに他ならないわけで、またそのような用途に使うこともほとんどなかった。まあでも仕方がない、今日は自分の誕生日ではなく、ハツミの誕

生日なのだ。そこはハツミの希望をくんで図書館に行くことにした。

切符を買い、自動改札を抜ける……取り締まる人間も組織もないのに、そんな律儀なことをする人間がいるだろうか。少なくとも自分はそういう人間ではない。そしてハツミもそういう人間ではなかった。改札の扉を大股で抜けると、僕は列車を待った。

やがて列車が来た。誰も乗っていない、もつと言えば誰も運転していない列車。静かに開くドアから、僕らもゆっくりと乗る。

「地下鉄も久々ね。相変わらず感動のない乗り物ね」

僕もそのハツミの意見に異論なしだ。

十分もしないうちに、僕はヨコハマに着いた。駅から少しのところにあるのが、横浜市立中央図書館である。

入ると完璧な空調のおかげか、とても涼しい。真夏日うんぬんが嘘のようである。

「じゃあ私少し見たいものあるから……二時半になったら、またこの入り口で会いましょう」

「うん」

そう言っただけは一度分かれた。ハツミにはかねてから見たい本があったようだが、自分には特にこれといって読みたいものもなかった。閲覧席にとりあえずは座ったが、やはり退屈で、気がついたら気持ちのいい空調に乗せられたのか、また寝に入ってしまった。

しばらくしてから僕は目を覚ました。腕時計は二時四十分を指していた。しまった、見事に遅れてしまったと思い、寝ぼけ眼のまま入り口に向かった。

ところがハツミは来ていなかった。すると五分ほどして、おぼつ

かない足取りで彼女はこちらに走ってきた。

「ごめんなさい。十五分オーバーね」

「いいよ、僕も十分遅れたし。涼しくてつい寝てしまった」
すると彼女は嬉しそうな顔をして、

「あら、私もよ」

と照れくさそうに言った。

図書館を出てから、僕は図書館のことを聞いた。

「図書館に來たいと言ったからには、読みたい本があったんだよね？」

ハツミは考えるような顔をしてから、

「そんなことも、ないかな」

とつぶやいた。

「え？」僕はおかしくて、笑ってしまった。

「じゃあ、君は何も読まずに図書館から出たのかい？」

「まさか」彼女も笑った。「スポーツの本をね、少しばかり」

「へえ、スポーツなんかに興味があるのかい」

「とことんしたいとは思わないけどね。どういふスポーツがあったか、には興味があつて、少しやってみたいなと思うのはいくつあるのよ」

「たとえば」

「ヤキユウ、とか」

「……あれはチームスポーツだった気がするぞ」

「そうね。一チーム九人、だったかな」

「他には」

「サッカー……」

「やろうと思えば一対一でも出来なくはないが……あれもチームスポーツだな。というかあのスポーツは役割が何種類があつて、その使い分けに意味があるんじゃないかな」
「そうね、あなたの

言うとおり」

「キャッチボールとか、スイミングとかは出来るかもしれない。競いにくいものではあるけどね」

「海に泳ぎに行くのはいいかもしれないわ」

「いや、僕は危ないことは嫌いだ」

「そうね、私も」

僕らの話はいつもこうだ。何か他愛もない話をして、最終的には二人同じ意見になる。もしくはそうなるようにお互い妥協する。会話にこれと言った充実感があつたことはなく、でもそれについて僕とハツミは考えることはなかった。

僕はまだ、彼女が何故図書館に來たいと思ったのか、分からなかった。それについて彼女に問いかけてみた。

「実は私自身もよく分からないのよね」

地下鉄に乗りながら、彼女はそう言った。

「というか、最近自分が何なのか、どうも分からないのよね」

「僕はいつもそうさ」

「じゃあ私もそうなのかしら」

でも確かに、実際のところ自分が何なのか分からないのは嘘ではない。実は世の中の仕組みや、外国語、科学的・数学的知識、文学。そのようなことは再放送垂れ流しテレビやこういった図書館で興味本位で浅く勉強しているが、自分のことは何か分からない。

というのは、自分の周りに自分が何かを教えてくれる人がいないからだ。それもまた、何故自分の周りにそういった人がいないのかを教えてくれる人がいるならまだしも、そういう人もまたいない。

名前だつてそうだ。自分はコーイチ、そして自分と話している目の前の女はハツミという。親もいないのに、でもそれは誰が決めたのだろう。いつしか自分はコーイチと名乗り、彼女も同様にハツミと名乗つたのだ。何故そういう名前なのか分からない。自分の名字

も分らない。

自分のことについては分らないことだらけ。自分の名前がコーイチであること、今は西暦2653年であること、自分が今生きていること。それしか確かなことは分からず、自分が分かっていることを証明してくれる人なんかいない。そうやって僕とハツミは生きてきたのだ。

一（後書き）

連載中のご意見・感想お待ちしております。

僕らは家に帰ると、畑の野菜たちの世話をすることにした。

誰もいないのだから、野菜も自分たちの手で育てるほかない。だが、生まれた時からそうしていれば、これが苦に思えることもない。むしろこの畑仕事のおかげで、暇な生活に少しの潤いが生まれるといふものだ。

それに自分たちの手で作ったものを、食べるのはやはり美味しい。僕らが野菜の水やりやその他の世話を、時間たっぷりかけて行っているうちに、辺りはあつという間に夕方になった。

「晩ご飯はカレーにしようか？」

「いいね」

今回は何の異議も妥協もなく賛成し、晩のメニューはカレーになった。

相変わらずハツミは料理が上手で、いくら意見が大きく食い違ふことがないとはいえ、僕には為せない業だ。旬の野菜を使った、良くてきた夏野菜カレーが運ばれてきた。

「どう、かな？」それでも不安げに聞いてくるのは、ハツミらしいところだ。

「問題ないどころか、美味しかったよ」

「そう」それでもなお、ハツミは不安そうな顔を浮かべる。

食事が終わった後、僕とハツミは並んで自分たちの使った食器を洗った。自分にはこれくらいのことしか出来ないの、ここぞとばかりハツミの分までですすんで手を動かすようにしている。

しばらくしてハツミがコップのすすぎに入ったときのことである。

何らかの拍子にハツミは手を滑らせ、コップを落としてしまった。コップは大破損、とまではいかないもののやはりそれなりに気になる程度には欠けていた。

「これは駄目ね。明日買ってこないと」

「そんなことないよ。まだ使えるって」

「でもやっぱり欠けていたら危ないもの」

自分はコップのフォローではなく、あくまでハツミのフォローをしていたので、何も言わないことにした。

全ての後片付けが終わった。この国には、少なくとも今の時代には夜の楽しみといったものなどはないので、やはり早く寝るに限る。もちろん昨日のような日もあるのだが、床につくのには早いにこしたことはない。あまり長居しても悪いだろうということで、僕は別れを告げることにした。

「今日は美味しいカレーをありがとう。いつも助かってるよ」

「いえいえ」

「じゃあ、おやすみ。また明日。予定がなかったら、明日コップ買うのに付き合っよ」

「ありがとう」

ここまでは、ここまではいつもの夜だった。

扉を開けてハツミの家を出ようとした、その時である。急いで走ってくる足音がしたかと思うと、自分の腕がしっかりと手で掴まれていた。その手はなんとハツミの手だった。

「ん？」僕はしばし混乱に陥った。

この家、どこかこの近辺に住んでいるのは自分を除いてハツミだけだ。それは生まれた時からそうで、至極当たり前のこと。自分が混乱したのはそこではなく、ハツミが僕の腕を掴んだという、そ

の行動である。

ハツミとは物心うんぬんのあたりから付き合っているが、考えてみれば僕の体に触れたことは一度もなかった。

不穏な予感が、脳いっぱいに広がりがつあつたが、僕はハツミを傷つけまいとして、あえて冷静な反応をした。ハツミを傷つけることだけはしてはならないのだ。

「……どうした？」

ハツミは答えない。答えがないわけではなく、いつも通り何かを言えないだけなのだろう。だが自分は焦っていた。冷静な反応を続けている余裕もあまりなかった。

「寝よう。もう夜だし。話は明日聞くから」

「誕生日……プレゼントはいららない、だから少しお願いがあるの」

「明日、聞くから……」

「うちんちで寝てってくれない？ また眠れないと思うと不安なの。誕生日のお願い」

少し不可解な気もしたが、誕生日という言葉に乗ってあげることにした。

ハツミが布団に入ったあとに、自分も布団にゆっくりと入る。なんだか不思議な心地だ。

はじめの十分ほどはいつものように雑談をしていたが、やがてすやすやとハツミは寝入ってしまった。

こんなに早く眠れるなら、自分はここにいる必要はないのではなからうか。そして今までに感じたことのない種類の罪悪感が僕を襲った。言葉で説明できないレベルではなく、全く見当のつかない感覚だった。逆にこつちが眠れなくなってしまったではないか、と困惑しつつ、しかしその罪悪感と同時にまた言い切れないような安心感もあり、目をゆっくりと閉じた。

次に目を覚ましたのは朝だった。隣にいた女は既に起きて、朝食を作っていた。

朝は普通のトーストだった。ハツミは冷蔵庫から何種類ものマーマレードやジャムを引っ張り出してきた。正直自分にとってはどれを食べても区別がつかないのに、と思いながらいそいそと働く彼女を見ていた。

用意が出来たようで、ハツミが席についたところで僕も席についた。そして例のごとく「ごめんね」と謝ってきた。おそらくトーストだけを朝食として人に出すというのは、彼女に罪悪感を感じさせるのには十分な要素なのだろう。

「いや、十分だよ。家じゃまともな物食えてないし」

「あ、いや、そうじゃなくて、昨晚の」

「あー……」とつさに「フォローしなくては！」という命令が頭の中をぐるぐる回ったが、不思議なことにこの話題では、十秒たっても二十秒たってもいい言葉が見つからなかった。結局「まあ、いいよ」などと曖昧になってしまった。

朝食を終えると割とすぐに二人で家を出て、昨日の話通りコップを買いに行くことにした。コップを買いに行くような目的で行くホームセンターもまたヨコハマにあるのだが、今日はモノレールで行くことにした。海を見たいから、という理由で。

どのみち、僕らは出会うことになっていたのだろうか。

二（後書き）

連載中のご意見・ご感想お待ちしております。

次回、少し展開が変わります。

モノレールに乗るのも、基本的には地下鉄と同じ要領だ。うまく自動改札を抜けて、プラットホームに向かう。ブザー音が後ろめたさを……などと言うのは初心者の話だ。今やこれなくして生きていけない。そうなればへっちゃらで、よっぽど昨晚の方が後ろめたいほどである。

このモノレールに乗ると、海が一望出来る。普段暮らしている分には、いくら地理的に近くても、やはり意識としては近くない。だがこのモノレールに乗ると話は別だ。列車が吊り下がっている関係上、自分たちの街は見下ろさない限り見えず、普通に眺めた限りでは一面海なのだ。おそらくこのモノレールの計画者もそれを考えてこういった路線にしたのではないだろうか。とにかく絶景なのだ。

「あれ」

ハツミが何かを見つけた。

「どうした」

「ほら、あそこ」

ハツミが指さした先、東京湾沖ヨコハマ港には何かが浮いていた。ボートと言ったほうがいい。しかしボートというのには少し大きく、船というのには少し小さいという、中途半端なものの代表例とも言えるような代物だった。

「物資を運ぶ船か？」

「さあ……でも本当に何でしょうね。外国人が来るとかじゃないでしょうね」

「まさか、ペリーじゃあるまいし」

実はペリーのことはあまり知らない。船うんぬんの関係だったことを、おぼろげに記憶していたので口に出してみただけだった。

コップ一個の買い物だけあって、買い物自体の時間は全然かからなかった。

帰り道僕は、ふと気になったことをハツミに聞いてみた。

「金なんか、どこで手に入れたんだ？ 普段の食に困ることはないし、働き口なんか口ポットに取られてちつともないだろうし」

「市役所よ。市役所の窓口の端末で、生活保護の申請をすれば受給できるのよ。一応収入はゼロでしょう。少しずるい気もするけど、お金が必要になる場面もなくはないから」

「そうなのか。今度申請してみよう」

今まで、必要な家具だけ自分で作ったりハツミからもらったりしていた。少しハツミから自立しないと思う気持ちもなくはなかった。これも昨晚のせいだろうか。

帰りのモノレールでもまた、二人して海を見ていた。先ほどのボートだか船だかもあったはあったが、話題に上ることはなかった。所詮、その程度の関心だったのだ。

モノレールは最寄り駅に着き、またいつものように改札を「抜けて」、駅から出た。

「あれ、さっきの船……」

最寄り駅からは、小さくはあるが港が目の前に見える。そこにさっきの船が停泊していたのだ。こうして見るとやはり小さいようだ。人が乗っていたとしても、人数は多くなさそうだ。いずれにしても自分とハツミの家にさえ危害が加わらなければ問題は無い。僕とハツミはかまわず家に向かって歩き出した。

目の前に家が見えて来た。ところがハツミの家の扉は開いていた。

「おい、扉が開いてるぞ」

「え」ハツミは不穏な表情を浮かべた。「鍵なら、きちんと閉めたよ？」

それは自分も確かに見た。ということは……。

「じゃあ、もしかして……」もしかするともしかするのかもしれない。考えられる相手はさっきの船だけだ。もしかして外国の盗賊なのだろうか。だとしたら大変だ。危害どころか、命を失うかもしれない。

僕は少し前に歩み出た。するとハツミは「危ないよ！」と強く、それでも目の前の状況に配慮してか、音量は小さめにして言った。僕はハツミの家の中を思いだし、玄関に割と大きめのホウキがあるのを思い出した。

「盗賊だったら、戦うしかないだろ。玄関にホウキだってあるし」「ホウキなんか何になるのよ」確かに、全くもってその通りである。しかしその時の自分は不思議に勇んでいて、そんなことなど大した問題ではなかった。要は行くか行かないか、それだけの話なのだ。「大丈夫、死にはしないから」僕は半分なだめるように言って、ハツミを残していった。

そうは言ってもいざ行くととなると怖くなくもない。というか普通に怖い。足取りはゆっくり、慎重に進む……予定だったが、どうも心と体が食い違っており、「慎重に！」と思いつながら、自分の足取りはどんどんどんどん速くなる。あっという間に扉の前に着いてしまった。

こうなっては仕方がない。僕は勢いよく玄関に入ると、イメージ通りの場所にあったホウキを持ち、靴のまま上がった。そこには二組の若いアメリカ人風の男女がおり、女はキツチンを、男はテーブルを物色していた。包丁が来るかもしれない。そう思って僕は、まず男の方にホウキを振りかぶった。だがそれは、いともたやすく掴

まれ、手の届かない方向に放り投げられてしまった。武器がない。すると今度は女の方が近寄ってきた。まずい。どうにかしないと。殺される……。

「Oh, I'm sorry. We are not this eyes, OK? (あら、ごめんなさい。私たちは泥棒じゃないのよ?)」

いきなり飛んできた言葉に混乱した。だが最初の文でまずは敵ではないことを、脳が認識した。次の文を飲み込むには、少し時間がかかった。ウィー、アー、ノット、シーヴス……NHKの英語講座がこのような時に役立つとは思わなかった。女は手をさしのべて来た。握手をしようということなのだろう。意味をくんで、僕も手を差し出し握手した。なるほど、アメリカ人の手という物はこういうものなのか、ということを学んだ。

「ナンテネ」

と僕には聞こえた。女が言ったのだ。アメリカ人が日本語を話してくるなどという予測が出来るほど、心に余裕は持ち合わせていなかった。ましてやファースト・コンタクトが英語だったのに、次に発したのは日本語。僕は、なおさら訳がわからなくなった。

「日本に渡ってくるのに、何も勉強しないで来るのはまずいでしよう。ペリーの時代じゃないんだから」

どうやら女は僕よりペリーのことを知っているらしかった。

「まあ、まずは私たちの話を聞いていただけじゃないかしら？」

「オ、オーケー」

まだ僕の方の頭は日本語に切り替わっておらず、おかしく思ったのか二人は笑った。

後ろを見やると、扉からハツミが顔をのぞかせていたので、手招きした。状況を空気で読み取ると、ハツミは自分の家によやく入ることが出来た。

「私の名前はジェーン。彼はマックス。年は十七よ」

マックスは僕の方を見て、ほほえみながら「ヨロシク」と言った。マックスは少々日本語が不慣れなようだ。それともジェーンの日本語の習得がすごいのだろうか。

「最初に聞くけど、あなたたちはアメリカってどどういう国ってイメージがある？」

そう聞かれて僕は「経済大国」、ハツミは「食べ物の量が多い」と答えた。

「食べ物の量が多いってのは相対論だから少し難しいけど、経済大国ってのは予想していたわ。別におごりでもなんでもなくてね。まあでも、こつちからしたら日本も大国なのよ」

ジェーンは一気にしゃべると、一息ついた。この間にまた次の言葉を考えているのだろうか。そしてまた口を開いた。

「ただし、結果から言つとそれは間違いね。少なくとも今のアメリカ力はそうね」

「何故そう言えるんですか？」と僕は質問した。すると、「答えは簡単よ」と彼女は言った。

「人間がないのよ」

なかなか面白い答えが返ってきたな、と思った瞬間である。

「日本で言う……国勢調査だけ？ それをしないと正確な数字はもちろん分からないわ。でも確かに言えることは、国勢調査をする人がいないほど人間がないのよ」

「どれくらい少ないんだい？」僕は話をどんどん進めたくなくなった。

「生まれてこのかた、マックス以外の人間を見たことがないわ。まああなたたちが初めてね。だから私の調査だとアメリカの今の人口は二人だわ」

話がどんどん面白くなってきた。

「でまあ、十七ともなれば旅を少ししてもいいかなと思って、日本に来たの」

「初めての旅にしては、規模が大きすぎやしませんでした？ 太平洋横断してきたんでしょ？」

「確かに途中何回も後悔したわ」

「で」方向性が面白いので、僕は話を戻した。「日本のこの状況に驚きましたか？」

「うーん」彼女は少し困ったような顔をした。「そうでもないわね」「それは何故？」予想外の答えが返ってきて、ハツミをさしおいて僕の興味は深まるばかりだ。

「科学の実験は、実験をする前に仮説を立てるわね。実験というのは仮説の証明をするもの。少なくとも私たちはそう考えているわ。だからまず仮説を立てて実験をして、その結果を元に仮説が正しいか間違っているかを考察・判断するのね」

「はい」

「私たちの場合は『先進国の国々では、アメリカと同様な極限状況下ともいえるような過疎現象が起きている』と立てたわけ。間違っていたら、仮説の立て直しだからまた試行錯誤は続くんだけど、仮説は日本の場合は合っていたことになるから、むしろがっかりかもね」

一通り話した後、ジェーンは「ごめんなさいね。別に日本にがっかりしたわけじゃないのよ。あなたたちとは仲良くやっていきたいと考えているわ」と付け足した。

「ええ、もちろんですよ」

「食料も一応持ってきたけど、お互い過不足あるだろうから、交換しましょ」

それにしてもジェーン、日本語が綺麗だ。自分の独学英语とは大違いである。

三（後書き）

突然ですが、外国人が出てきました。

ここから先は彼らも重要な登場人物となります。

その中でこの物語の中の「僕」は、彼らの一部の行動に対してアメリカ人の国民性・文化などと判断します。これは実際の国民性などをどうこう言っているわけではなく、あくまで「僕」の考えと、いずれ振り回される自分たちとジェーンたちのギャップとして描かれるだけのものです。ご了承ください。

次回も早めに投稿いたします。（既に出てはいるので）

ご意見・ご感想お待ちしております。

四（前書き）

きちんとしたお話が始まるのは六・七になると思いますが、そろそろゆっくりと、本題に入り始めます。

四

ジェーンの人間性は話しているうちに分かってきたが、とても大人っぽい人間だ。感情的になるところをほとんど見せない。もし自分とジェーン・マックスが暮らしている世界に、まだ社会というものがあったならば、ジェーンはきっと世渡り上手になっていただろう。ビジネスを始めても、普通に成功しそうなタマである。

そういえば、こんなこともジェーンに質問された。

「コーイチとハツミはどういう関係なの？」

この質問には答えるのに大変苦労した。長年一緒に生きているのである。いやむしろ逆なのかもしれない。やはり自分たちのことを一番分かっているようで分かっていないのは、他ならぬ自分たちなのかもしれない。

「ただの幼なじみよ」

ハツミはいたって冷静に、そう答えた。

……正直少しがっかりした。もちろん変な関係ではない。そうはいつでも、ただの幼なじみで済まされるのも、言葉に出来ないもどかしさがあった。

聞かれたからには、と思って僕も質問した。

「じゃあジェーンとマックスはどういう関係なの？」

するとジェーンは割とさっと答えを出した。

「恋人に行くか行かないか？ いずれにしても私は彼のことを頼りにしているわ」

すると、横でマックスも小さな声で「ミー、トウー」と言った。

日本語は理解出来るが、話すのは苦手なようだ。

ハツミの家にジェーンとマックスが泊まることになり、場所を見つけてよかったと喜んだ彼らは、やがて船から荷物を運んでこなくては、と言った。

「生活に必要な物はある程度積んできたのよ」

僕とハツミもそれを手伝い、港とハツミの家を何回も往復した。

そういえば、このヨコハマの港に船が停泊しているという風景を見るのは初めてかもしれない。

運び終わって、それらを眺めてみると、実にすごい量の生活用品が並んでいた。ベッドはもちろん、食器や非常食、ノートパソコンや机などいろいろある。ジェーン曰く、ハツミと僕はいつでも使いたかったら使っていていいらしく、その条件に自分たちも不満はなかった。

そして夜になった。お礼として晩ご飯はジェーンが作ってくれた。ジェーンが作る料理もハツミといい勝負くらい美味い。ただ量はさすがアメリカと言ったところだろう。始めのうちは勢いが良かった僕とハツミも、気がついたらお腹いっぱいになって、倒れ込んでいた。その中でもジェーンとマックスはがつがつ食べ続けていた。それでよく太らないものだと思ったが、実際アメリカ人は慎重もあるわけで、やはり初めて接する外国人との間には文化の壁も少なからずあるのだな、と感じた。

寝る時間になると、ジェーンとマックスはベッドの整備をした。

その時にハツミに声をかけられた。

「今日もうちで寝ていってくれない？ ジェーンとマックスもまだまだ慣れないだろうし、何かあった時のために。布団はもちろん別にするから」

「分かった」昨日と違い、すんなりと僕は承諾した。そういえば昨

日は布団が別ではなかった、ということを読み出し、恥ずかしい気持ちになった。

いよいよ消灯になった。ジェーンに、

「あれ、あなたは家に帰らないの？」と言われたが、

「二人ともまだ日本に慣れないだろうから、何かあったときのためにいてくれと、頼まれたようです」と変な自信を持って、答えることが出来た。それに対してジェーンは「なるほど」と言った後に、
「あなたたち、ただの幼なじみじゃないわね」と小さな声で、僕にだけ聞こえるように言った。やはりジェーンは頭がいいな、と僕は思った。

なかなか寝つけなかった。

自分の身に何かがあるわけでもないのに、ここ最近本当に寝つきが悪い。

すると自分とハツミの寝床から少し離れたベッドから、ちょっとした声が聞こえた。ジェーンとマックスだろう。そして今気づいたが、彼らは同じベッドで寝ているのだ。船から持ってきたときのことを考えると、二人は本当に一つのダブルベッドしか持っていないのだろう。ということはここまでの船旅でも……考えるとキリがないので、やめた。

ところが、

「……I love you……I love you…

…」

と聞こえてくる。そしてキスのような、チュッチュツと言った音も聞こえてくる。アメリカの夜はこんなにも、ねっとりしているのか？ 気持ち悪いようなそれらの音が子守歌代わりになったのだろうか、自分は眠りに落ちた。

夢の中では誰かが自分に呼びかけていた。

「許さんぞ……許さん……」と言っているように、少なくとも自分には聞こえた。執念だろうか、怒りだろうか。とにかく許さないのだ。何かに対して、とても激しく怒っているように見えた。その誰かを凝視しようとするほど、ぼんやりとしていく。

耐えきれなくなって、「誰だ!」と叫ぶと、僕は目が覚めてしまった。

起きると、自分の体は汗びっしょりだった。まだ夜、夜明け前頃であろうか。ジェーンとマックスはさすがにもう寝ていた。

「……寝たと思ったら、こんな夢見るとはな」

あきれかえってしまい、その夜はもう寝ないことにしようと思った。

するとその時、ハツミがこっちの布団に入ってきた。そして彼女は「誰なの……誰」と寝言を呟いた。やはり彼女も同じ夢を見ているのだろうか。僕は布団からも起き上がり、朝になるまで台所でぼーっとして過ごした。

四（後書き）

8月7日で、なろうデビューから1年になりました。これからも佐乃海テルをよろしくお願いいたします。

ご意見・ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4014c/>

神様に、ないものねだり

2010年10月17日10時05分発行